

則となると話はまた別です。とりわけ罰則を伴う規則は必要最少限度のものに限定されるべきです。遵法精神を培うことの重要性は、どこの学校でも徳性の涵養をはかる全体計画の中に明確に位置づけられているはずです。しかし指導と評価の方法の如何によっては規則の運用をめぐるいろいろな問題も生じて来るものです。

一旦ひとつの校則をつくり、それをしっかり守ることが出来るように徹底しようとすればするほど、懲罰主義に傾かざるを得ないのではないのでしょうか。悪くすると、ついには全体の秩序のためと言う大義名分のもとに、「見せしめ」的な処分に突き進む勢いを制止することが出来ない状態にまで追い込まれるケースを、私はずいぶん見てきました。罰則を公平にしかも的確に適用するためには、規則違反の事実を正確に認定しなければなりません。するとそのことを峻別するための細則を事こまかに設定しておかなければならなりません。校則の本来の主旨を離れて、単に罰則を逃れるためにはどのように振舞えばよいかと言う方向に、無意識のうちにすりかわってしまうことのほうが恐ろしいことなのかもしれません。基本的人権や、こと人命に関わるような重大な問題についてはともかくとして、生活指導はおよそ警察活動のようなものとは馴染まない、むしろそのようなものとは無縁な生活態度を助長することが本来の使命なのではないのでしょうか。

*

とかくこれまでのわが国の教育は、ある一定の枠組みからはみ出すものを忌み嫌うと言うか、排除すると言う傾向を否定しきれないものがあったように思います。少なくともそのようなものを自分のクラスなり、わが校に出現させ存在させてはならないと考えるのでしょうか。国家にしろ学校にしろ、とくに発展途上の段階では目標主義、画一主義の体制の中で競争主義を煽ることの必要性も是認されるかも知れません。今日のわが国のように、充分成熟もし、一層複雑さの度合を深めつつある社会にあっては、個性をみがき、自分の力で判断し、創造的に生き抜くことができるように、その基礎を培うことが不可欠です。

競争主義はある一定の限度を越えて激しさを増すと、そのことだけが主流となってしまって、従来からあった幾つもの他の目標を目指す行動に対する評価を相対的に低下させてしまうものようです。進学のための受験競争は昔からあったのです。それでも偏差値という一つの物差しだけで人の能力を推し計るような事はありませんでした。進学競争を含めて緩やかないろいろな競争が並存していたからなのです。

*

教育のプロとしての教師にとって、教育技術の研さんに心するのは当然です。むしろいま最も求められているのは、注意深い洞察力に裏打ちされた目で個々の児童生徒ひとりひとりを見る力を養うことではないのでしょうか。それは私達教師自身にとって、人間愛を基調とする自らの人格形成に関わる問題でもあるわけです。